

『在台二世』文学者新垣宏一のモラエス研究…その原点

荒 武 達 朗

はじめに

周知の通りヴェンセスラウ・デ・モラエスは徳島と縁の深いポルトガル人文学者である。彼は一八五四年リスボンで生まれ、海軍兵学校を経て海軍士官としてアフリカやマカオで勤務した。一八八九年（明治三二年）に初来日、何度かの往来を経た後の一八九七年（明治三〇年）に居を神戸に定め、外交官に転身した。一九〇〇年（明治三三年）彼は徳島出身の日本人女性、福本ヨネ（おヨネ）と結婚した。これがモラエスと徳島との関わりの始まりである。一九一二年（大正元年）おヨネの他界を機に彼は領事の身分を捨て徳島へ移り住んだ。おヨネの姪にあたる斎藤コハルと暮らす中で『徳島の盆踊り』（一九一六年）などを執筆した。一九一六年（大正五年）コハルもまた世を去り、後に残されたモラエスが追慕の情を以て著したのが『おヨネとコハル』（一九二三年）であった。一九二九年（昭和四年）七月一日モラエスは自宅の土間で倒れているのを発見された。享年七五歳であった。

生前の彼はその著作のほとんどをポルトガルにて出版していたが、徳島の市井の人びとの中では彼がどのような人物であるのかはほとんど知られていなかったという。彼の逝去後は一九三二年（昭和六年）に前田正一、坂本章三らが三回忌の法要を開いた。この後毎年七月一日にはモラエスの追悼の法要が催され現在に至る。死後六年を経た一九三五年（昭和一〇年）七月一日にはこれまでにない規模で大々的に七

回忌の法要が挙行された。発案したのは県の学務部長を勤める湯本二郎である。法要は在東京の県人、外務省情報部長を務める天羽英二の支援を受け徳島のみならず日本全国を巻き込んだ一大行事へと発展し、政府要人も花輪や追悼文を寄せて大きな盛り上がりを見せた。参列した賓客は二〇〇人を数え、その中には県出身の新居格、花野富蔵の他、佐藤春夫もいた。この七回忌の法要はモラエスの顕彰が広く行われ、彼に対する認知度が高まる契機となったとされる¹⁾。

この法要の半月後のことである。一人の青年が植民地台湾より故郷の徳島へと帰省した。彼の名は新垣宏一（にいがき こういち）、この時の身分は台北帝国大学文政学部²⁾の二年生であった。彼は台湾の高雄で生まれたので正確には帰省とは言えぬが、本籍は徳島におかれていた。何年かに一度、休暇を徳島の叔父の家で過ごしており、今回は四年ぶりの徳島行であった。この帰省の中で彼はモラエスの生涯とその著作に触れ、そしてこの旅が彼の晩年まで続くモラエス研究の原点の一つとなったのである。

モラエスの関連書籍の一つに新開宏樹『モラエスのとくしま散歩…モラエス文学の背景』（出版カラムス、一九七五年）という書籍がある。同書は『徳島市推薦図書』に指定され当時の山本潤造徳島市長筆の『モラエスのとくしま散歩』をよるこぶ³⁾という文を冒頭に掲載している。全体の構成は全六〇個の項目から成り、各項の分量はそれぞれ一頁から三頁である。この内「散歩のはじめに」「モラエス略伝」「モ

ラエス関係家図表」を除く五七項がモラエスに関わる場所・事物を写真と解説文を附して紹介している。この書籍の著者は奥付には明示されておらず「新垣宏樹 解説」と記されるのみである⁽²⁾。本書の目次部分に添えられた「謝辞」からは一四名にのぼる人びと及び団体に「指示談話、写真借用、編者参照」などの便宜を図ってもらった旨が記されているので⁽³⁾、彼がモラエスを知る人びとの談を聞き取り、先行する著述を整理し、その上で取材で得た情報を加えて執筆したものと考えられる。

この新垣宏樹こそが一九三五年（昭和一〇年）のモラエス七回忌の直後に徳島に帰省した青年、新垣宏一のペンネームであった。徳島県立文学書道館には新垣宏一の寄贈した書籍、書類、原稿、写真が所蔵されている。この中に本書を執筆するに当たって撮影された写真が多数含まれているので、新垣宏一と新垣宏樹が同一人物であることに間違いないあるまい。

ではこの新垣宏一とはどのような経歴を歩んだ人物なのだろうか。徳島県教育関係者ならば新垣が戦後、徳島県立教育研究所の所長を勤め、県立高校の校長を歴任し、この間に特に国語科教育に関わる文章・著作を発表してきたこと、一九五〇年代の『徳島県教育月報』に「ことばの日記帳」というコラム⁽⁴⁾を連載していたことを知る人もいるかもしれない。また『徳島県史』の教育関係の記事はその幾つかが新垣の執筆によるものである⁽⁵⁾。さらに鳴門市立坂東小学校、上板町立松島小学校、阿波市立吉野中学校、美馬市立三島中学校の校歌の作詞を担当している。県立高校退職後は四国女子大学（現、四国大学）で教職に就き文学研究に没頭した。以上の事績からも新垣が郷土徳島の教育文化の発展に尽力した人物であることが窺い知れよう。さらに徳島県立文学書道館の設立にも関心を寄せていた点も付け加えておきたい⁽⁶⁾。その最晩年に自伝『華麗島歳月』を著し、二〇〇二年に逝

去した⁽⁷⁾。

一方、日本近現代文学という視野からは、徳島県における教育者、文化人という姿とは全く異なる新垣宏一像が浮かび上がる。戦前・戦中期の新垣は植民地台湾における「在台二世」文学者という評価を付与されている。彼は学生時代より多数の短歌、詩、小説、随筆を執筆するなど台湾の文壇で一定の活動を行ってきた。戦後しばらくの間当地に留用された後、本籍である徳島に引揚げた。戦後の新垣は台湾時代のことにについて公的な場では語ることが少なかった。それ故、現在の徳島では文学者としての彼はほとんど認知されておらず、二〇二四年一月現在県立文学書道館にも彼に関わる展示はない。

そこで本稿は第一に在台二世文学者としての新垣宏一について紹介することを目的とする。戦後の彼はほとんど小説などを執筆しておらず台湾時代と徳島引揚げ後との間には一種の断絶があるようにも感じられる。しかし筆者の見たところ、モラエスへの関心という一点においては、この二つの時期の彼には連続した一貫性があるようだ。第二の目的として新垣宏一のモラエス研究という視点から文学研究者としての彼の手法に接近を試みたい。

なお本稿は二〇二三年三月に刊行した報告文「『在台二世』文学者新垣宏一の見た徳島のモラエス」⁽⁸⁾に加筆・修正を施したものである。

一 新垣宏一の略歴

新垣宏一の事績と作品については日本と台湾双方の文学研究者が何本かの文章を著し分析を加えているが、専門的に扱った研究は少ない⁽⁹⁾。台湾では二〇〇〇年に刊行された雑誌『淡水牛津文芸』の第七期と第八期が新垣宏一の自伝と作品の中文訳を集中的に掲載するこ

とでその存在が広く知られるようになった。日本ではまず和泉司が新垣宏一とその作品を取り上げた論文を何本か発表しており、植民地台湾文学界における彼の立ち位置を考察した。この点で和泉の研究は文学者新垣宏一に注目した先駆的成果であると言えよう。続いて大東和重『台南文学・日本統治期台湾・台南の日本人作家群像』及び『台南文学の地層を掘る・日本統治期台湾・台南の台湾人作家群像』は日本統治期の台南の文芸界にスポットライトを当て日本人作家、台湾人作家のパーソナリティ、著作、相互の関係性を論じている。新垣宏一にとって台南は台北帝大卒業後の最初の勤務地であった。彼は当地の風土と人びとに大きな影響を受け自己の文学の骨格を形成したとされる。新垣はこの二つの書籍全編を通して登場しているが、特に前著は一章を割いて彼の人物像と作品に考察を加えている⁽¹⁰⁾。現在のところ新垣宏一の人物像を理解するにはまず細かい一書である。

大東によれば、戦前・戦中期における新垣の文学活動は居住地により三期に分けられる。すなわち第一期が一九三一年（昭和六年）から一九三七年（昭和十二年）までの台北高校・台北帝大在学時代、第二期が一九三七年（昭和十二年）以降の台南第二高等女学校で勤めた台南時代、第三期が一九四一年（昭和十六年）末前後から台北第一高等女学校へと転勤して後の台北時代である⁽¹¹⁾。台南に居を移したのは一九三七年七月のことと考えられるが台北へ戻った日時はやや不正確である。新垣の自伝『華麗島歲月』によれば彼の台北赴任は四一年四月とされている。これに対して大東は同年末前後のことであろうと考証している⁽¹²⁾。そしてこの第一期から第三期の時期区分に加えて一九四七年（昭和二年）に台湾から日本に引揚げてからの徳島時代が第四期と見てよいだろう。第一期から第三期は彼の文学者としての成長、成熟の過程であり連続性が見られるが、前述の通り第四期は教育

者、研究者としての性格が顕著である。

以下本節では主に新垣宏一の自伝『華麗島歲月』並びに和泉司と大東和重の研究に基づいて在台二世文学者新垣宏一の経歴をまとめていくこととする。彼の作品に関する評価、分析については筆者の能力と本稿の任を超えるところであるので、先行研究の和泉、大東両氏の論文と著作を参照されたい。新垣は徳島県を本籍とし、一九一三年（大正二年）日本統治時代の高雄に生まれた。少年時代の彼は純粋な日本人町で育ち、台湾の人びととの交流は殆どなかった。一九一九年（大正八年）に高雄第一小学校、一九二七年（昭和二年）に高雄中学校に入學した。中学には成績優秀な台湾人の学生が在籍していたこともあり、この頃から現地の人びとに対する認識が深まっていた。この中学時代、台湾南部で発行されていた『台南新報』に詩を投稿するなど早くから文学に親しんでいたことが窺われる。一九三一年（昭和六年）台北高等女学校文科甲類に入學、文芸部に所属し小説などを執筆発表するようになった。そして一九三四年（昭和九年）に台北帝国大学文学部文学科に進學した。

新垣の文芸活動はこの台北大学在学中に本格的に始まった。和泉司によれば一九二〇年代初に台湾人によって始められた「台湾新文学運動」は三〇年代に入ると日本語での活動が目立つようになったという。三〇年代半ばには台湾人作家による全島規模の文壇が形成されつつあった。新垣は在日日本人としては例外的にこの運動に関わっており、『第一線』『台湾文芸』『台湾新文学』といった文芸同人誌に作品や投書を寄稿している。同じ頃、会津若松生まれだが台湾で育った西川満が台湾での文芸活動を活発に展開し、新垣にも大きな影響を与えた⁽¹³⁾。新垣の自伝によれば彼は西川の詩を「台湾風土のエキゾチズムの新世界」と高く評価し、「台大でもこの新勢力に抗する城を築くため」に『台大文学』という機関誌の発行に関わったという⁽¹⁴⁾。こ

の『台大文学』は台北帝大短歌会が中心となって刊行した文芸誌であり、新垣宏一もまたその創刊の発起人の一人となっている。同誌の性格については張文薫の論文が詳細に紹介している¹⁵⁾。次節で検討する「徳島旅情」もまたこの『台大文学』に掲載されたものである。

以上が新垣宏一の第一期であるが、多くの論者が認めるように続く第二期の台南時代に彼の台湾観と作風は大きな転機を迎えた。一九三七年（昭和十二年）に台北帝大卒業をした後、新垣は台南第二高等女学校に国語科教師として赴任した。新垣の赴任校は台湾人学生が中心であり、様々な階層の台湾人とふれあう中で、彼の「日本人としての二世意識が、無意識の「台湾人」に変わって」いったのである¹⁶⁾。当時の台南には濱田隼雄、國分直一、前嶋信次らが各学校の教職にあつて文芸・学術方面での活動を展開しており、新垣も台南の文壇の一員として親交を深めた。彼らの文章を発表する場の一つが当地で発行されていた『台南新報』（一九三七年四月一日に『台湾日報』に改称）であり、芸欄の編集主幹である岸東人が彼らの活動を後援していた¹⁷⁾。同コラムの実態については松尾直太が専論を著している¹⁸⁾。

当時の新垣は佐藤春夫の台湾に関わる作品に心酔しており、その舞台となった地域の調査にも取り組んでいた¹⁹⁾。後に彼は次のように回想している。

「台南の町を、何かを求めて徘徊するようになったのは、佐藤春夫の『女誠扇綺譚』に出会ってからです。この作品は台南取材して書かれたフィクションですが、台南の古い町並みのどこかに、あの夢綺談があるような気にとらわれたものです。」²⁰⁾

河野龍也の研究に拠れば佐藤春夫は一九二〇年（大正九年）七月より一〇月まで台湾及び福建に滞在、旅行し、その間の経験を基にして所

謂「台湾もの」と称される作品群を著した。その代表作品である『女誠扇綺譚』には台南の街に関する描写が随所にあり、台南在住の文芸愛好家の中に熱心な探求者の一群を生み出した。河野は新垣をその探索に最も熱中した人物であると評している²¹⁾。この文学作品の基になった舞台の実地調査と考証は「佛頭港記」「女誠扇綺譚」と台南の町」などに代表される文章に結実した²²⁾。この過程で彼の台湾、台南、そして台湾人に対する認識は大いに深化し変容を遂げ、さらにそれが彼の文学作品の方向性に规定的な影響を与えたと考えられる。加えて一九四〇年（昭和十五年）に第一部が刊行された庄司総一『陳夫人』もまた新垣に強い刺激を与えた。新垣は庄司総一の『陳夫人』について次のように回想している。

「その頃に庄司総一の『陳夫人』が発表されました。……。私は庄司の描く台南の土地が、自分の呼吸との密着感が強くなり、私が生徒たちの家庭風俗を理解する大きな手がかりとなりました。」²³⁾

和泉司によれば新垣は『女誠扇綺譚』の世界に傾倒していたが、西川満『赤嵌記』を境にそれが「乗りこえる対象」にシフトしたとする²⁴⁾。大東和重もまた新垣の作風に『女誠扇綺譚』や『赤嵌記』の影響を見て取るが、中でも庄司総一『陳夫人』は新垣にとって衝撃的であり、これ以降彼は台湾に根づいた文学を執筆する傾向を強めたと指摘する²⁵⁾。かくして新垣はロマンチックな描写とは距離を置き、台湾の風土と人間、その生活に密着した創作を目指すようになったのである。

第二期の台南時代、新垣と当地の台湾人作家との関係については大東和重『台南文学の地層を掘る』（二〇一九年）が詳しい²⁶⁾。特に親しく交流していたのが邱永漢、王育霖、王育徳といった台南出身の青年文学者である。邱永漢は後に直木賞を受賞し、王育徳は日本亡命後

に言語学者としても著名となった。その兄の王育霖は後述するように一九四七年の二・二八事件で殺害された。

続いて第三期、台北へ居を移してからの新垣宏一について概観しておきたい。一九四一年（昭和十六年）に新垣は台南を離れ台北州立第一高等女学校へと転任した。台南を題材とした作品を含め、彼の小説は特にこの時期、台北に居を移して以降に数多く執筆されている。例えば「城門」（一九四二年一月）、「盛り場にて」（一九四二年四月）、「訂名」『芸台湾』（一九四二年二月）、「砂塵」（一九四四年一月）はいずれも台南の台湾人社会を舞台とした作品である。

戦火が激しくなる一九四二年（昭和十七年）頃から彼は皇民化教育に則した作品を発表するようになった。前出の「城門」盛り場にて「砂塵」、並びに「船渠」（一九四四年一月）がその代表例である。これらの作品は日本統治下の植民地支配を賞賛する性格を強く帯びている。彼の愛国心に満ちた教育者という立場は否定できない。例えばやや時間を遡るが学生たちを引率して日中戦争に赴く台湾人の軍夫を見送りに行ったという回想からもその一端を見ることができる。

「昭和十二年の七月に日中戦争が起こり、教師になりたての私にも、まじめな愛国思想がおきたのも当然のことでした。……。台湾人も皆、「日本人」なのだ。台湾人と「支那人」は、別の人間なのだと思ったのです。」⁽²⁷⁾

ここに見える新垣は日本の戦争遂行とそれに協力する帝国臣民としての台湾人に微塵の疑念も抱いていない。しかし一方で三〇年代後半から進行する皇民化運動について次のように述懐している。

「皇民化は台湾人を日本人に変えようとする政治教化体制であった

と想像します。そして、それはある程度成功したと思いますが、台湾で生まれ育った内地人、ことに私のような本島人教育に生きた存在には、本島人側では内地人化するつもりであったのが、内地人少年が無意識のうちに台湾人化していったのではないかと、今日になって思うのです。私の作品『城門』『盛り場にて』『砂塵』などの台湾風景は、単に「皇民化」を主題としているものではないと思います。成長した台湾二世の心情的台湾化の生んだものです。」⁽²⁸⁾

新垣自身は植民地台湾において戦意高揚の為の文章を積極的に著していた。これに対して如上の戦後の回顧は、その当時の彼の心境をそのまま表現したものは言えまいが、台湾人を日本人と完全に一体視しようとしていたわけではなかったと述べる。「内地人少年が無意識のうちに台湾人化」していくという日本人像は、日本統治時代末期の台湾社会で広く共有されたかどうかは議論の余地がある。日本統治下の多様な人間像を見るに単純化されたイメージで日本統治時代を語ることは慎まねばなるまい。ただ少なくとも在台二世文学者新垣宏一のスタンスとして、台湾という社会、そこに生きる人びとへと接近し、それを表現したいという欲求があったことは間違いない事実であった。

一九四五年（昭和二十年）の敗戦後の二年間、彼は教員として中華民國台湾に留用された。帰国直前に一九四七年（昭和三十年）の二・二八事件を目撃している。この事件については種々の調査、研究、証言、記録があり多くの台湾人が被害を受けたことは明らかである。新垣とも親しく交際していた王育霖はここで殺害され、王育徳、邱永漢もまた亡命を余儀なくされたが、彼は自伝において台湾人と国民政府双方に配慮した記述をしている。

ここから新垣の第四期が始まる。彼は一九八五年（昭和六〇年）十月

一日に記した『鄭津梁の日本見聞記』に寄せて」の中で次のように回想する。

「わたくしは、本籍のある徳島に、(昭和)二十二年に引き揚げましたが、ここには自分の文学仲間がいるわけではありませんし、また、すでに自分の年輩からいって、若い文学青年たちと腕を磨き合うというような時代からは遠くなったわけで、それで教育学問題研究の世界へ何となく進んでしまったわけです。それで創作は止めてしまっていますが、若い時代に、苦勞し、あるいは楽しんだ文学世界は、今でも心の中にあたたためつづけているつもりでいます。」⁽²⁹⁾

後の回想ではあるが第四期の新垣の文学創作に対するスタンスが明確に現れている。帰国後の彼は文学者というよりは教育者としての途を歩み始めたのであった。

『華麗島歳月』所載の戴嘉玲「新垣宏一先生年譜初稿」によれば⁽³⁰⁾、新垣は一九四七年(昭和二年)五月二日に佐世保に引揚げ、同年九月に徳島県立撫養高等女学校(後、県立撫養高等学校、さらに県立鳴門第一高等学校と改称、現在は県立鳴門渦潮高等学校)の教員に任用された。一九五一年(昭和二六年)に徳島県立教育研究所所長就任、一九六三年(昭和三八)四月に徳島県立穴吹高等学校校長、一九六五年(昭和四〇)年四月に徳島県立名西高校校長、一九六九年(昭和四四年)四月に徳島県立富岡西高等学校校長をそれぞれ歴任した。名西高校在任中には同校の芸術科新設に携わっている⁽³¹⁾。

最後の富岡西高等学校での新垣については常松卓三『富岡西高等学校百年史序説』一九九六年にその人柄と容貌を伝える記述が掲載されている。

「新垣校長は自ら始業時前、補習授業を行った。専門の漱石文学を講じたのである。」

「校長は金縁眼鏡、金の鎖、指輪、日曜の外出は和服姿、羽織・袴、ステッキと坊っちゃん研究者らしい明治のいでたち、坊っちゃん論争は進むのである。」⁽³²⁾

この「坊っちゃん論争」とは松山中学から富岡中学(ともに旧制)へ転勤した弘中又一教員を小説「坊っちゃん」の主人公に比定する新垣の見解を指す。新垣は後の四国女子大学時代に何本かの漱石関係の研究論文を発表するが、高校教員時代にすでに漱石研究に取り組んでいたことが見て取れよう。

一九七二年(昭和四七年)に同校を退職した後、四国女子大学(現、四国大学)に任用された。これ以後、夏目漱石、林芙美子に関する研究論文を『四国女子大学紀要』などの媒体に何本か発表しているが、中でも漱石に関する研究を比較的多く執筆している。前述の夏目漱石の『坊っちゃん』のモデルについての考察に対して、大東和重はこの研究が『女誠扇綺譚』考証の手法と同様「四国在住の地の利を生かしており、現在でも参照される貴重な成果となっている」と評価している⁽³³⁾。大東は続けてモラエス研究もまたその「考証」の延長と評している。この点は筆者も首肯するところである。その成果が筆名新開宏樹で著した『とくしまモラエス散歩』(一九七五年)であった。

この間、新垣宏一は台湾とどのような繋がりを持っていたのだろうか。娘の佐藤紫(ゆかり)さんの回想「父の思い出と共に」からは新垣が一貫して台湾を懐かしみそこでの思い出を大事にしていたことが窺われる⁽³⁴⁾。だが公的な場で彼が台湾について発信することはほぼなかった。台湾の友人との交流は戦後も続いていたと考えられるがその詳細もまた不明な点が多い。邱永漢の小説「韓非子学校」(一九五八

年)は徳島のM高等学校を舞台とした作品であるが、執筆にあたり情報を提供したのが新垣である可能性が高い⁽³⁵⁾。台北高校在学時に知り合い親しく交流した黄得時の来訪、王育徳の台湾脱出は自伝では僅かに触れられるにとどまり、例外的に鄭津梁とその子息の来日については詳細に述べられている⁽³⁶⁾。台湾を戦後初めて再訪するのは一九八九年(平成元年)のことである。

一九九九年(平成十一年)二月二十四日、台湾時代の新垣に大きな影響を与えた西川満が世を去った。同年、台湾で刊行されていた『淡水牛津文芸』第三期、第四期は「西川満先生追悼特輯号」を組み西川の追悼を行った。新垣宏一はここに「華麗島文学」と題した追悼文を寄せている⁽³⁷⁾。その後、同誌の編集に携わる張良澤と戴嘉玲が同年一月二七日に徳島の新垣宏一宅を訪問した。この時の訪問記「訪新垣宏一先生」は翌年の『淡水牛津文芸』第七期に載っているが⁽³⁸⁾、おそらくこれが新垣宏一の晩年の姿を詳細に伝える最後の記事である。同誌第七期とその次の第八期は特集を組んで新垣の自伝『華麗島歲月』のもとになる文章とその主要作品の中文訳、年譜を掲載し、彼の事績を顕彰した⁽³⁹⁾。台南時代の新垣を支えた岸東人の逝去に寄せた新垣宏一「岸東人さん」追憶の記」(二〇〇一年十月三三日執筆)が現在のところ確認できる新垣最後の文章である⁽⁴⁰⁾。その約八ヶ月後、自らの自伝『華麗島歲月』が一冊の本として世に出る直前の二〇〇二年(平成十四年)六月三〇日に、新垣宏一は逝去した。

二 新垣宏一とモラエス研究

前節で確認したように新垣宏一の第四期、すなわち一九四七年の徳島引揚げから後の長い期間、彼は小説などの作品をほとんど発表していない。この時期の新垣は在台湾時代(第一期～第三期)の彼とは大きく

性格を異にするようだが、モラエスへの関心という通底する共通点を見出すことができる。結論を先取りして言うならば、彼の『調査』『考証』というスタイルは第二期台南での『女誠扇綺譚』の探索に始まるのではなく、第一期に既にその萌芽が見られた。それが形として表れた作品の一つが一九三五年(昭和一〇年)夏の徳島行の記録である。本稿冒頭で述べたようにこの年の七月一日にモラエス七回忌が大々的に開催され内外の注目を集めた。その余韻が覚めやらぬ同じ月の半ば、新垣は徳島に帰った。モラエスにゆかりのある地を探訪し、翌年七月に随筆「徳島旅情」を発表した。そしてこれが彼のモラエス研究の出発点となったのである。

新開宏樹の筆名で刊行した『モラエスのとくしま散歩』(一九七五年)より以前、新垣は戦後間もない頃、徳島県教育研究所所長時代に「モラエスの遺品の思い出」(一九五二年)と「モラエス遺品について」(一九五五年)の二本の文章を発表している⁽⁴¹⁾。両者とも研究というよりは回想録、随筆という性格である。佐藤征弥によれば、一九五〇年代前半のモラエス忌の寄せ書きが近年発見された。寄せ書きは一九五二年(昭和二十七年)から一九五五年(昭和三十〇年)までの四年分であるが、その内一九五三年、五四四年の色紙に新垣の名前が見える⁽⁴²⁾。彼が徳島に引揚げて後、早い内からモラエスに関心を寄せていた証左である。『モラエスのとくしま散歩』は彼がライフワークとして続けてきた中で得た知見に基づく著作であると言えるだろう。

では在台二世文学者であった新垣宏一はいくつからモラエスに関心を寄せるようになったのだろうか。前出の「モラエスの遺品の思い出」(一九五二年)は次のような書き出しで始まる。

「昭和十年七月一日といえは今から十七年も前の話であるが徳島で盛大なモラエスの七回忌が催されたことを覚えている人も多いこと

であろう。古い話といえは古い話である。わたくしが文科の大学生で夏休のときの事であった。わたくしが台湾から何年に一度かの帰省をしたそのときはすでに七月中旬であったから、記念講演会などはすんでいたが、佐藤春夫をはじめ、ポルトガルの公使などが来てもよい会があったようである。」⁽⁴³⁾

このとき新垣宏一は台北帝国大学文政学部二年の学生であった。何年かに一度の帰省とあるが、正確には七年前と四年前に徳島を訪問しており、新垣の家は徳島の親戚との付き合いを密に保持していたようである⁽⁴⁴⁾。七月中旬に徳島に帰着したためこの七回忌自体を目撃することはできなかったが、この後から新垣のモラエスについての探索が始まる。なお前述の通り後の台南時代（一九三七年―一九四一年）において、彼は佐藤春夫の「台湾もの」と称される作品群に傾倒し台南の町で調査を行うようになった。在台二世作家としての性格形成にとつて佐藤春夫の影響は大きく、新垣は晩年までその作品に関心を寄せていた。この台南時代に先立ち直接の邂逅はなかったにせよ佐藤との接点が一九三五年（昭和一〇年）のモラエス七回忌にもあった点は興味深い。

新垣は「その頃の新聞をあこれとスクラップしたり、いろいろな人にあつてモラエスの話を聞いてまわつて、夏休を十分たのしく暮した」のであつた。

「湯本二郎氏は徳島県に赴任される前には長崎県におられてあそこではシーボルトのことをいろいろ研究されてたとかいう話もされた。そしてモラエスについては当時の徳島日日新聞に連載されていた會田慶佐氏訳の『徳島の盆踊り』を読むようにとお教えくださったので、さっそく光慶図書館にでかけて新聞のつづりを出して読ん

だりした。図書館長は坂本さんで親切にモラエスのことについて研究の便宜を与えてくださった。モラエスだけでなく阿波国文庫中の源氏物語関係の文献を調べてくるようにと植松安教授からの命を果たすために書庫の縦覧をも許していただいた。」⁽⁴⁵⁾

ここに登場する湯本二郎は当時の徳島県学務部長を勤めていた。彼の発案と差配によつて一九三五年（昭和一〇年）七月一日のモラエス七回忌が盛大に開催されたのであつた。光慶図書館長の坂本さんとは坂本章三、これまでもモラエスの事績の顕彰に努めてきた。なお植松安は台北帝国大学で教鞭をとる国文学の教授である⁽⁴⁶⁾。

「光慶図書館以外ではそれぞれの御紹介で、ある時は、田所眉東老人につれられて、潮音寺のモラエスの墓を訪ねたり、前田正一氏の案内では伊賀町のモラエス旧居を見たりした。」⁽⁴⁷⁾

新垣はこの間に前田正一や田所眉東というモラエスをよく知る人や郷土史研究家の助けを得てモラエスに関わる場所を参観し、知見を広げていたようである。前田正一はモラエスの近所に住む郷土に詳しい人物である。三回忌は彼ら親しい者が中心となつて執り行われ、それ以降毎年七月一日に法要が開かれることとなる。田所眉東は徳島の郷土史に関わる文章を多数著しており当時より著名であつた。

「さて、モラエスの記念展覧会は光慶図書館であつたわけだから、その出品物が、まだ別室にそのままにしてあつたのでそれを見せていただいた。それについて今残っているわたくしのノートには次のように記されている。……」

「わたくしのこの十七年前のノートを今みると、光慶図書館の一室

の雑然とし、古道具屋の店先のような印象が思い出される。」⁽⁴⁸⁾

新垣は「モラエスの遺品の思い出」を著すに当たり自らの記憶をたどるとともに手元にあった『ノート』を参考にしたことが分かる。これこそが新垣が台北帝国大学時代に著した随筆「徳島旅情」、すなわち新垣の最初のモラエスに関わる文章である。上の二本の引用文（「モラエスの遺品の思い出」六十七頁）の間には、「徳島旅情」九五頁から九六頁にかけての部分がほぼ同じ構成で引用されているので、間違いないだろう⁽⁴⁹⁾。「徳島旅情」の内、徳島での新垣の行動を読み取れる部分のみ文末に掲げた。適宜参照されたい。ただしこれが刊行された冊子体なのか、あるいは原稿を書き付けた文字通りの「ノート」なのかは判然としない。

この「徳島旅情」は全編一四頁、一九三六年（昭和二年）七月二〇日刊行の『台大文学』第一巻第四号、八六―九九頁に掲載された。全体の構成は四つの部に分かれており、節の小見出しなどはつけられていない。なお『台大文学』の性格については本稿第一節で簡単に紹介している。

第一部分（八六―八七頁）は導入部分で徳島の風物、人びとの暮らし、そして夏の休暇に訪れた叔父の家での情景が描かれている。

第二部分（八七―九四頁）はモラエスの略伝と潮音寺の訪問記である。伝記部分は当時刊行されたモラエスの邦訳本『日本精神』（一九三五年）、「おヨネと小春」（一九三六年）などを参考に執筆されたと考えられる⁽⁵⁰⁾。この前半部分は相当の紙幅を割いて感傷的に叙述が進められる。紙幅の関係上文末の「徳島旅情」（抜粋）からは省略した。この後半（九三―九四頁）では新垣が潮音寺にモラエスと福本ヨネ、斎藤小春の墓を訪ねた時の情景が描かれる。彼は短い休暇中合計三回同地を訪れたという。この時の郷土史家、田所眉東の案内についてのくだり

は「モラエスの遺品の思い出」（一九五二年）にも詳細が述べられており表現は異なるものの内容は一致している。田所眉東は新垣の為に墓の拓本を摺ってくれた。後に新垣はこの拓本を台湾で『台湾日日新報』の西川満に提供、西川はこれを紙面で紹介した（後述）。

第三部分（九四―九七頁）の光慶図書館での資料調査は新垣に深い印象を与えた。九五―九六頁では図書館で観覧したモラエスの遺品の収蔵品について述べる。この部分は「モラエスの遺品の思い出」で『ノート』より引用した箇所と表現・内容ともにほぼ一致している。

第四部分（九七―九九頁）はモラエスならびに「お米」と「コハル」への追憶を徳島の盆踊りと絡めて叙情的に記す。そして新垣は徳島の盆踊りが終わる頃、再び台湾へと戻っていった。

以上が「徳島旅情」の構成である。この文章はモラエスの作品についてほとんど踏み込んだ記述をしておらず、徳島でのモラエスの暮らしに重点が置かれている。だが第二部分後半と第三部分で述べられる所は在台二世作家新垣宏一の手法を知る上で興味深い。新垣は台南で佐藤春夫『女誠扇綺譚』の舞台の調査・考証を通して自らの作風を確立していったとされる。一九三七年（昭和二年）の台南時代（第二期）のことである。しかしそれより前、台北大学在学中（第一期）に著された本文には既にその手法の萌芽を見て取ることができるのである。

「徳島旅情」の末尾にある【小記】には次のように書かれている。

「本年七月一日はモラエス翁八回忌に相当する。この文は作夏の旅の記である。早く一文を草して、徳島の人々の厚遇に謝するつもりであったが、早いもので又もやモラエス忌はめぐってきた。
……（昭和十一年七月一日）」

「徳島の人々の厚遇」とは前述の通りモラエスについての調査で便宜

を図ってもらったことを指す。「モラエスの遺品の思い出」(一九五二年)「モラエス遺品について」(一九五五年)にも詳細が記されているように、彼の探索を助けてくれたのはモラエス七回忌を発案した県学務部長の湯本二郎、これに先立ち三回忌の法要を執り行った前田正一、坂本章三図書館長、著名な郷土史家の田所眉東らという面々、すべてモラエス研究のキーパーソンである。新垣が台湾に戻ったのは盆踊りが終わった頃であるから、おそらく八月末か九月のことだろう。この二ヶ月に満たない帰省の間に彼は精力的に徳島を歩き回り調査を進めたのであった。このような関係者への取材、関連する事物の確認、潮音寺の墓地訪問など現場調査は、第二期の台南時代に佐藤春夫『女誠扇綺譚』の世界に耽溺し街を「徘徊」する彼の姿を彷彿とさせるものである。だが時系列に従うのであれば徳島のモラエスに惹き付けられ街を探索したのが先である。或いは新垣の台南における調査、考証の原型はこの徳島でのモラエスゆかりの地探訪に求められるのかもしれない。

新垣宏一は一九三五年(昭和十年)の夏の休暇を終えて台湾へと戻った。モラエスの余韻はその後も続く。翌三六年七月『台大文学』に「徳島旅情」を発表して一月後、西川満は『台湾日日新報』にモラエスに関する記事を著している。西川は同紙の学芸欄の編集を担当しており、一九三四年(昭和九年)八月より自ら『書物放浪』という書籍紹介コーナーを連載していた。その第五〇回(八月一九日)で『おヨネと小春』を取り上げた⁽⁵¹⁾。

「去年の夏、徳島に遊んだ一友人より贈られた『おヨネと小春』の写真が、私の机辺にもある。モラエスが終生愛したこの二人の女に私も亦線香を立てたいやうな気持になった。」

書評はこのように結ばれるが、この「徳島に遊んだ一友人」とは新垣宏一に他ならない。その三日後の八月二日の紙面には「モラエスの墓」と題しモラエスの墓の写真と拓本をキャプションをつけて掲載している⁽⁵²⁾。

「モラエス著『おヨネと小春』に関して一文を発表したところ『台大文学』の新垣氏より、モラエスの墓の拓本惠贈を受けた。同誌は徳島なるモラエスの家や墓を訪ねて、種々調査した人であるが、この拓本も同氏の手になるもので墓の四面が全部刷られてゐる。」

「徳島旅情」第二部分よりこの拓本が田所眉東の手によるものであることが判明する。新垣はこれを西川満のコラムに提供したのであった。徳島への帰省から一年たっていたが、新垣宏一が折に触れてモラエスに意識を向けていたことが窺い知れる。

そしてこの後、モラエスは遠い徳島のこととして新垣の意識の中に埋没してしまつたようである。彼は第二期の台南時代、第三期の二度目の台北時代において在台湾二世文学者としての地位を確立した。第二期と第三期にモラエスは新垣の関心事の中で後景に退いていたようであるが、第四期に至り再びその世界に姿を現した。その研究の成果が『モラエスのとくしま散歩』(一九七五年)であった。ここでも新垣は写真機を手に徳島を歩きモラエスの生涯と作品、彼に関わった人々のゆかりの土地と事物を紹介している。「散歩のはじめに」で彼は次のように言う。

「本書のねらいは、徳島風景鑑賞でもなく、モラエス伝記でもない。……。モラエスが文学に生かし続けた徳島の風物人情は何か。すなわちモラエスの文学の背景となるわが徳島、わが阿波とはどんな

な風土であるか。……。モラエスの目をわが目として阿波の風景をながめ、モラエスの心をもって徳島の生活を味わうとすれば、どのような場所、どのような生活舞台があるか。」⁵³

この関心と手法は大学二年の時の徳島でのモラエス調査の延長上にある。これを台南の『女誠扇綺譚』に読み替えれば第二期台南時代の彼の調査・探求にもそのまま当てはまるだろう。そして第四期に彼は再びモラエス研究へと回帰した。ここに第一期から第四期まで通底する新垣宏一のスタイルを見出すことができるのである。

おわりに

以上本稿は徳島県に本籍を置く在台湾二世作家新垣宏一の生涯とそのモラエス研究について紹介した。内容の要約は省略するが、拙文を終えるにあたり自伝『華麗島歲月』に述べられていない事実を一点だけ指摘しておきたい。新垣は徳島引揚げ後の第四期において国語科教育に関する著述を多数発表するとともに、モラエス、夏目漱石、林芙美子、井原西鶴についての研究を進めていた⁵⁴。この他、おそらく一九八〇年代、新垣はまた一人の人物に注目していたようだ。

徳島県立文学書道館に収蔵される新垣宏一寄贈の資料の中に、薩摩治郎八に関する研究資料が含まれている。薩摩治郎八はバロン薩摩(サツマ)という名でも知られる。一九〇一年(明治三四年)四月一日に東京で生まれ、一九七六年(昭和五二年)二月二日に徳島で逝去した。薩摩は戦前期のバリで過ごし同地の日本人芸術家に多大な支援をするなど、文化の発展に大きく貢献した人物である。徳島は妻の薩摩利子さんの故郷で、治郎八は阿波踊り見物の為に来徳、そして病に倒れ当地で療養生活に入った。彼は徳島を気に入り、快癒後も亡くなる

までこの地で過ごしたという。彼の生涯と事績については村上紀史郎の研究が最も詳細であるので参照されたい。また瀬戸内晴美が徳島に暮らす薩摩治郎八を題材とした小説を発表している⁵⁵。なお薩摩利子さんは本稿執筆中の二〇二四年一月四日に逝去された。

文学書道館に収蔵される関連資料は全五点である。新垣はこれらを「薩摩治郎八資料」として整理していた。その内訳は瀬戸内晴美の「ゆきてかえらぬ」が一点、薩摩治郎八の年譜が一点、薩摩治郎八が執筆した回想録の原稿が計三点である。「ゆきてかえらぬ」は刊行物をそのまま複写したものである。年譜は薄い冊子体の印刷物であり「昭和六一年十一月作成」と記される。原稿三点はおそらく薩摩治郎八の回想録の類である。三点の内、二点にはそれぞれ「百億圓を喰いつぶした話」「我が世界放浪記」というタイトルがつけられている。資料はその自筆原稿を複写したものである。この資料から薩摩治郎八について何か新しい事実が発見されるかどうかは筆者には判断できない。ただ新垣宏一が薩摩について調査を進めていたという点だけは確認できた。

新垣は何故薩摩治郎八に関心を寄せていたのか。或いはモラエスと同様、異郷の徳島で晩年を過ごしその地に埋葬されたという共通項を見出すことができるかもしれないが、これは全て推測の域を出ない。また機会があれば考察を深めたいと考える。

徳島旅情(抜粋) 新垣宏一

(『臺大文學』第一卷第四号、一九三六年(昭和十一年)七月二〇日刊行)

静かな城下町——阿波の徳島は未だに古めかしい姿を残してゐる。

萬葉の歌人によつて「まゆのごと雲井に見ゆる」と歌はれたその名も優しい眉山の翠したる麓、新町川をはさんで立ち竝んだ白壁の土藏建は、朝日夕日に美しく照り映えて、私に何とも言へない落ちついた昔風な感じを與へるのだ。人口八萬近くの都市ではあるが、電車さへ走らない古風な日本町である。建物、橋、それから徳島の人々の生活、それらが又何と昔の匂をこめたものであることか？ 大阪、神戸、これらの西洋文化に眩惑された旅人が、一夜の旅寝ののちこの徳島市のせまい町通りを歩いてゐると、しとやかな日本娘の典型的な優姿に幾度となく出合ふであらう。そして美人系に屬する此の土地では珍しく變つた風格の女性に合ふ——やはりそのタイプは新しくない。由來徳島は舊藩時代に不逞な原侍（野武士）を招撫する一策として名古屋美人を以て彼らの歸順を誘ふ政策が行はれてゐたといふ話が行はれてゐるが、成程さういつたいはれのありさうな古風な美人が多く残つてゐるやうである。モダンな洋装の麗人の出たのもほんの二三年のことでないか知ら——。私が七年前と四年前に見た徳島の町には洋装の美人はゐなかつたやうに思はれる。思ひ出すのは、あの新町橋の柳の下を蛇の目、塗下駄、黒朱子襟をかけた日本娘の通る風景である。——幾度目の夏であらうか、私は又かうしてこゝに住む叔父の家へ休暇を過す身となつた。

「兄さん、前より、えーつと（ずつと）大けえなつたなあ」

など、久し振りの従弟達にとりかこまれて、暑い臺灣の話をしつゝ、遠い旅を思つた。私の旅ごころはひごく女性的なロマンチックなものが多いいのは相變らずである。

【和歌三首省略】

×

×

さう、徳島美人の話のことだが、私はこれらの女達に會ふたびに、遠くポルトガルから萬里の海を渡つてきて、永住ののち死んだ不遇の詩人ウエンセスラウ・デ・モラエスの心を捕へた此土地のニッポン・ムスメ「お米」「小春」の二人の女性の名を思ひ浮べる。

モラエス？ 御存知だらうか？ この異人の名を——。いや、この土地の人々でさへ數年前まではこの名を知らなかつたのだ。私達はラファチオ・ハーンを知つてゐる。ピエール・ロティを知つてゐる。又古くはフェル・ナン・メンデス・ピントの名をも記憶してゐる。これらの歐人は日本に来て、美しき日本を讀へた文人である。そして私達は、今は、最近まで生きてゐた——しかも名も知れずにゐた——モラエスを新しく發見したのだ。日本を深く愛し、後半生四十年を日本に送つたポルトガルの文豪モラエスは、末の十七年間を亡き戀妻「お米」と「小春」の二人の墓所の地徳島の陋巷に住み、つひに此の地に悲惨な生涯の幕を閉ぢて丁度今年が七年になる。そして此の七月一日には此の不遇なモ翁の七回忌が始めて盛大に行はれた。生前餘り翁の眞の姿を知ることなく、敢て厚遇しなかつた徳島の市民達は、今更の様に翁の偉大な遺徳に報いようとしてゐるのだ。

眉山のふもと潮音寺の墓地に、多くの墓どもに混つて、前妻「お米」後妻「小春」そして我が紅毛の詩人「モラエス」の三つの靈は靜かに眠つてゐる——此の靜かな土地の平和に守られて。

モラエス——此文のゆきが、り上こゝにモラエスの略傳を記さねばならない。

【モラエス略伝 モラエスに対する印象 約二五〇〇字省略】

そして、此の孤獨の不自由な紅毛人は日本のキモノをきて、足袋をはいた姿で、この古い「さむらひ」の町で死んだ。然し彼の最も喜ん

だであらうことは、彼の生前の熱烈な希望通り、小春と同じ墓にその灰を埋められたことである。

私はこの美しいロマンスを探つて潮音寺の墓地を訪ねた。潮音寺！淋しい貧しさうな寺である。

「この小さい寺のこの墓地の名を知つてゐるかな？ 潮音寺の墓地といふんだよ。それにしても、この言葉の意味が解るかな？ なかなか難解なんだ。翻譯すれば——果てしなく久遠の潮の音する寺とでもいふかな。」

とモラエスは言ふ。詩人の彼の言葉は美しい。彼は自分の住む伊賀町のことを「栗のいが町」と言つてゐるんだ。

古い墓にまじつて、福本ヨネの墓がある。大正元年八月廿日「法喜蓮照信女」と刻まれてゐて、行年に卅八歳。そのすぐそば、モラエスと小春同體の墓が一基ある。表に、「ウエンセスラウ、モラエス之墓」と記され、裏には小春の戒名「艶覺妙照信女」と記されてゐる。紅毛人の片假名の字と、ニッポンムスメの名の記されたこの墓は見るからに由所ありげである。後には眉山の松の木立が迫つてゐて、この寺町一帯はつねに静かである。私は三度この墓をたづねた。来るたびに深い哀語を思ひ出して、こゝに眠る三人のことを考へないであられなかつた。（モラエスは佛教を理解し、輪廻や未來説を美しくも信じてゐた）。私は一度はたゞひとりで來た。二度目には従弟を連れてきた、彼は中學の一年坊主である。私の説明を聞き乍ら、この異様な墓の前でたゞ眼をパチ／＼させてゐたが、恐らく私の旅の心に訴へて來る哀愁を知らなかつたのかも知れない。三度めには、叔父の知人田所眉東老人とこゝを訪ねた。老人は著名な郷土史研究家である。私の切望を要れて下さつて、この墓の拓本をとつて下さると言ふのである。私達はこの「さむらひ」氣の失せない古風な老人と此の墓地を訪れた。夏の午後で暑い日であつた。私達は靜かにこの墓を一枚の紙の上にうつしとつて、

この不思議な世界の中に我を忘れてゆくのだつた。私はその時ほど旅愁を感じたことはなかつた。

【和歌五首省略】

× ×

順禮と淨瑠璃の町、そして盆踊りで有名な徳島である。その盆踊りが近づいてゐた。さうだ、モラエスは「徳島の盆踊」『O Bon-odoren Tokushima', 1916, porto を書いた。彼は徒然草風な日本的隨筆は實に巧である。この「徳島の盆踊」は彼の隨筆の一つなのである。私は縣學務課長湯本二郎氏の御教示によりこの譯を讀むことに決心した。昭和九年六月廿二日からの徳島日日に會田慶佐氏の譯載されたものを縣立光慶圖書館に通つて讀んだ。圖書館は舊城跡にある、建物のうしろには城山といつて五十米ばかりの小山があつた。木がよく茂つてゐて、頂上に上れば徳島市街を見渡すことが出来る。茶店がある。五位鷺が澤山棲んでゐて澤山がガアガアと啼いてゐる。そして、モラエスがよく書いた「正午の號砲」はこの山の上に仕掛けてあつて、時々私をびつくりさせるのである。あゝ、いつになつたら徳島は號砲を廢めるのだらう——もつと面白いことは、例の寺町一帯の寺が一時間置きにゴーンゴーンと時を報じてゐるのも時代がかつてゐる。

私はこの城山の近くで、従弟が通學のために世話になつてゐる、叔母の知人、戸田氏の宅に泊つて、この圖書館に通つた。この圖書館にはモラエスの遺品が全部收藏されてゐたが、私は坂本館長の好意でこれらの珍品を見せていたゞいた。

モラエスの遺品！ どんなにすばらしいものと相像されますか？ 死後二萬圓の貯金を残してゐたといはれる彼の生活は、實際は全く方

丈の庵の生活の實行にすぎなかつた。めばしいものは二千冊に近い書物で、あとはガラクタものだ。さうだ、全くガラクタものばかりだ！衣類（それも粗末な）、酒の空瓶、煙草入、煙草、なたま煙管、ペン先（三百十六本）、繪葉書、封筒、寫眞、門札、石膏像、陣笠、瓢箪等々、私はあまりのことにモラエスは蒐集狂だ！と決めてしまつた。貝殻や貨幣のコレクションは堂々たるものだ。處が湯本氏はモラエスは珍品蒐集家ではない。彼は、過去追憶のために凡てを保存した。その上、彼は質素で、物を粗末にしたり品物を廢棄したりしなかつたと言はれた。成程先のちびた古かうもり等があつたつけ。然し何と言つても驚嘆すべきことがある。それは明治天皇（彼の最も尊崇した）の尊影及び恩賜の巻煙草一本を大切に保存してゐることだ。如何に彼が精神的に日本人であつたか、知られる。藏書は、英、佛、葡語のものが多し、ハーンのもの全部ある。珍しいものはフエルナンメンデスピントの巡國記だ。これは彼自身も自慢して書いてゐる。とにかく彼は日本に關する著は皆研究したらしい。しかし彼の日本語は巧みでなかつたやうだ。片假名がやつとかけたのである。しかし、私は一枚のハガキに「あさがほにつるべとられてもらひみづ」とたど／＼しい筆書きを見た。何かを見てかいたのであらう。何によつて日本語を學んだのだらう思つて日本語に關する參考書を探して見たら、ジーバール著、Grammaire Japonais と英語の Japanese Selftaught それから小學讀本の卷一、二を持つてゐて、ハタ、タコ、とかいた右側に鉛筆書で hata tako 等と記してある。平假名になるとさうしたルビが施してゐないから覚えようとはしなかつたらしい。

遺品のアルバムの中から私は數々のお米や、若き日のモラエスの寫眞を見た。晩年の異様な田舎老人風なのに比べて神戸時代の美しきモラエスもあつた。そして浮世繪美人のやうなお米のあだ姿も見出された。寫眞を見乍ら私はモラエス遺愛のオルゴールの齒車をそつと廻し

て見た。チンカラコンとこの不思議な器^{ウツ}戒は昔の異國の音を響かせた、柔い、エキゾチックな音色、私はモラエスが、雨の日あの伊賀町に孤獨の身を横へて獨りしづかに弄んだオル^{マイ}ゴールを想ひ、このオルゴールだけは未だ生きてゐるのではないかと感じた、一體このオルゴールは何處から來た品物だらうか？ 私はその記された不思議な横文字を讀まうとしてゐた。

私はその夜、異國の夢に目覺めて寢られなかつた。金色のひげをもち柔和なまなざしを持つた淋しい老人の姿を思ひ浮べた。そしてあのオルゴールを――。この家までもあの五位鷺の聲が不氣味に聞えて來るのだつた。何故にこの夜中まで彼奴らは啼き騒ぐんだらう！。

【和歌四首省略】

× ×

たび／＼のノスタルヂアを歎きつゝも、モラエスの興味は私から取り去ることか出來ず、一度は伊賀町の方丈を尋ね、郊外の慈雲庵に彼の佛壇を訪れた。だが何と言つても、七回記^{セツ}の祭典をきつかけにこれからのモラエスは幸福であらうといふことを知つた。私は靜かにモラエスの將來の名聲を祈つた。しかし、私の胸に淋しくまとひつくのは「お米」と「小春」である。モラエスの愛した女、「お米」と「小春」は徳島の生んだ薄幸の日本ムスメである。モラエスは愛した、熱愛した。この二人の女故に彼の來世觀は決つてしまつた。私が、慈雲庵を訪ねたとき、老尼（智賢尼さん）が佛壇の抽出からとり出してきて見せてくれた本三冊、一冊は、Obon-odori em Tokushima、でその巻頭にお米の墓の寫眞が載せられてゐた。今一冊は “O-yone e Ko-Haru” 「お米と小春」他の一冊は “Ko-HARU” 「小春」であつた。モラエス

が生前にお米と小春への供物として、佛壇に入れたといふことである。今ではモラエスもこの佛壇へ入つてゐる。此度はじめてこしらへたといふモラエスの位牌には「藻光院殿局空文献大居士」と記されてゐる。

「お米と小春」は彼の作中もつともすぐれたものといはれるものだ。愛の詩人モラエスは夏のゆふべ門に飛んで來た螢を、「お米だらうか？小春だらうか？」と涙ぐむ。彼の女性はずべて儚くあの世に逝つた。そしてモラエスの追憶はいつまでも残つた。それ故に彼の情熱は年老いても若々しかつた。そして、盆が來れば死んだひとりの亡き魂が再び自分を訪れて來ると確く信じてゐた。お米と小春の魂が靜かに螢になつてモラエスの家の門にふはつと舞ひ込んで來ぬでもないと思つてゐたことだらう。あゝ、彼には盆踊の頃が如何になつかしいものであつたらうか、彼の著「德島の盆踊」の扉には

「忘き人々の追念に　モラエス」

と記されたのである。

そのモラエスも死んでしまつた。德島の人々は時々此の異人のことを忘却することがあつても、盆踊が來ると新しい追憶の日を迎へるであらう。

德島の盆踊の夜を、私は戸田氏の家族や親類達全部で、この踊を見物した。新町橋を渡つて、紅提灯は躍り、弦歌の聲は昔乍らのざわめきと雑踏を織り出した。こゝに德島の古い傳統は火花と散つた。幾年か前の夜、あの可憐の娘小春は踊の夜咯血して此のさんざめきの中に病院にかごで運ばれたといふ。モラエスの驚き、悲しみは想像に餘りがある。彼は此の街をくつがへす様な祭りさわぎのなかをうろくとし乍ら、かうした歌舞の騒ぎを何と感じたことであらうか？。

私は、橋を渡り、川を照し、街から街へ奔流する狂濤亂舞の群集をみつめ、やがて近づく別離の日の近づくのを考へてゐた。

数日の後私は高松、屋島見物に私の旅愁を深めて力なく德島へ歸つた。その頃は高松でも屋島でも盆踊をやつてゐた。そしてこれらの盆踊が靜かになつた頃私は又、遠い臺灣に歸つて行つた。

【和歌六首省略】

【小記】 本年七月一日はモラエス翁八回忌に相當する。この文は昨夏の旅の記である。早く一文を草して、德島の人々の厚遇に謝するつもりであつたが、早いもので又もやモラエス忌はめぐつてきた。私は堅苦しき記録を好まない。又モ翁のことは、花野富藏氏譯モラエス原著「日本精神」のあとがきに詳しいから私は駄文をつゝしまねばならぬ。モラエスの著は花野氏によつて逐次翻譯されつゝある。既刊のものは「日本精神」「德島の盆踊」「日本夜話」（以上第一書房）と最近に「お米と小春」（昭森社）がある。一讀せられんことを乞ふ。（昭和十一年七月一日）

注

(1) 岡村多希子『モラエスの旅…ポルトガル文人外交官の生涯』彩流社、二〇〇〇年。佐藤征弥『モラエス七回忌法要の背景…顕彰、觀光への期待、『日本精神』刊行の意味するもの』、河田和子「貴司山治におけるモラエスの影響…日本の文学者におけるモラエス受容」（以上、令和二年度徳島大学総合科学部創生研究プロジェクト経費報告書「異文化に照らし出された四国…グローバルな視点からの地域文化に関する文献調査から」二〇二一年所収）、河田和子「戦前のモラエス受容における花野富藏と佐藤春夫…日本の文学者におけるモラエス受容（二）」（同令和三年度報告書「異文化に照らし出された四国…グローバル」な観点からの文献調査から」二〇二三年所収）。佐藤、河田論文は徳島大学附属図書館の「徳島大学機関リポジトリ」で閲覧可能。https://repo.lib.tokushima-u.ac.jp/ja

(2) 新開宏樹『モラエスのとくしま散歩・モラエス文学の背景』出版カラムス、一九七五年の奥付には「新開宏樹 解説」と記されている。また『徳島新聞』一九七五年六月二五日には新開宏樹の名で「モラエス伝秘話」を執筆している。

(3) この一四名の人物は、斎藤益一、玉田ワキ、島田アサコ、木山富子、中山英一、松本進、久米惣七、佃実夫、花野富蔵、辻正、横山昭、福本博、岡本和夫、入江克也である。他、徳島県立図書館、徳島市中央公民館、徳島市史編さん室、東海寺。

(4) 筆者は『徳島県教育月報』のごく一部を閲覧しただけなので詳細は不明。

(5) 徳島県史編さん委員会『徳島県史』第四巻、徳島県、一九六五年の第五編第四章第三節「藩校・家塾・寺子屋」。同、第五巻、一九六六年、第六編第四章第一節「学校教育」。同、第六巻、一九六七年の第七編第四章第一節「学校教育」。

(6) 新垣宏一「徳島近代文学館創設へ」『徳島の文化』六号、一九八八年。

(7) 新垣宏一著、張良澤・戴嘉玲訳『華麗島歲月』(台北)前衛出版社、二〇〇二年。新垣の娘、佐藤紫さんが清書し、それと中文訳を合わせた対訳形式で写真、年譜、代表作を収録して刊行された。同書はこれに先立ち刊行された新垣宏一著・張良澤『華麗島歲月』(華麗島歲月(続完))『淡水牛津文芸』第七期・第八期、二〇〇〇年四月・七月を書籍にまとめたものである。タイトルの『華麗島』は台湾の意、全八章中七章までが在台時期の記述である。また台湾時代を回顧したものとして新垣宏一「鄭津梁の日本見聞記」に寄せて(一九八五年十月一日執筆、鄭津梁「鄭津梁の日本見聞記」徳島出版、一九八五年所収)及び新垣宏一「台湾時代」(一九九八年八月五日述了、「台北第一高女ものがたり」編集委員編『台北第一高女ものがたり』台北第一高等女学校同窓会みどり会、一九九八年所収)がある。

(8) 荒武達朗「『在台二世』文学者新垣宏一の見た徳島のモラエス」令和四年度徳島大学総合科学部創生研究プロジェクト報告書『異文化から照らし出された四国・地域における外国人受容の意義についての歴史的考察』二〇二三年所収。本稿注(1) 徳島大学附属図書館「徳島大学機関リポジトリ」で閲覧可能。

(9) この研究状況の総括は和泉司「在台二世の描く『台湾』と『台湾人』」新垣宏一「城門」を中心に「『跨境』日本語文学研究」一号、二〇一四年、大東

和重「新垣宏一と本島人の台南・台湾の二世として台南で文学と向き合う」『外国語外国文化研究』(関西学院大学法学部外国語研究室)一六号、二〇一四年などに拠った。大東和重の論文は後に同著『台南文学』日本統治期台湾・台南の日本人作家群像(関西学院大学出版会、二〇一五年の第六章に大幅に加筆の上同名のタイトルで収録されている。和泉司は外に「日本統治期台湾文壇における『女誠扇綺譚』受容の行方」『藝文研究』(慶應義塾大学芸文会)八三号、二〇〇二年ならびに「新垣宏一『砂塵』論『異文化を見る』という視点」『三田國文』三八号、二〇〇三年(後に加筆・再構成を経て同著『日本統治期台湾と帝國の(文壇)』(文学懸賞)がつくる『日本語文学』ひつじ書房、二〇一二年に収録)において新垣宏一の文学史上の価値と作品を論じている。台湾では前掲『淡水牛津文芸』の第七期、二〇〇〇年四月と第八期、二〇〇〇年七月が新垣の自伝と作品の中文訳を掲載している。文中で新垣宏一に言及する論文は多いが、専論としては林慧君「新垣宏一小説中的台湾人形象」『台湾文学學報』一六号、二〇一〇年及び石川隆男「在台二世と台湾との対話」『台湾民間文学と新垣宏一』『城門』(『日本語日本文学』(輔仁大学外語学院日本語学系)五一号、二〇一二年)がある。石川には未刊行の博士論文であるが新垣のディアスポラ作家としての性格を分析した石川隆男「戦時下在台二世日本作家之身分認同」新垣宏一「『流散』(戦時下にみる二世作家のアイデンティティ)新垣宏一の『ディアスポラ』」輔仁大学、二〇一〇年(本文は日本語)があり、台湾国家図書館にて閲覧可能である。

(10) 前注の大東和重、二〇一五年。同「台南文学の地層を掘る」日本統治期台湾・台南の台湾人作家群像(関西学院大学出版会、二〇一九年)。

(11) 前掲大東和重、二〇一五年、三三〇頁。

(12) 前掲大東和重、二〇一五年、三三六―三七頁。

(13) 前掲和泉司、二〇一四年、一七四―一七六頁参照。西川満(一九〇八年―一九九九年)は会津若松で生まれ、三歳の時に台湾に移り住んだ。

(14) 前掲新垣「華麗島歲月」二〇〇二年、三九四頁。

(15) 張文薫「帝國アカデミーの「知」と一九四〇年代台湾文学の成立」『台大文学』と「東洋学」を中心に「日本台湾学会報」一四号、二〇一二年。

(16) 前掲新垣「華麗島歲月」二〇〇二年、四四四―四五頁。

(17) 濱田隼雄、國分直一、前嶋信次については前掲大東和重、二〇一五年を参照。新垣宏一「岸東人さん」追憶の記(二〇〇一年十月三日執筆、岸萬里編『鳳

風木の並木・岸東人遺稿集」私家版・岸洋人・美智子刊行、二〇〇七年所収。

- (18) 松尾直太『台湾日報』の「学芸欄」について『天理台湾学報』一五号、二〇〇六年。

- (19) 前掲新垣『華麗島歲月』二〇〇二年、五五頁。

- (20) 前掲新垣『華麗島歲月』二〇〇二年、四八・四九頁。

- (21) 河野龍也「佐藤春夫と大正日本の感性」『物語』を超えて」鼎書房、二〇一九年、第三章「『女誠扇綺譚』論」『物語』を超えて、第一〇章「『女誠扇綺譚』と台南」世外民たちの横顔」。新垣宏一の評価並びに彼の探訪の記録については同書の第一〇章、特に二四〇・二四一頁参照。

- (22) 新垣宏一「佛頭港記」(一)・(六)『台湾日報』一九三九年(昭和十四年)六月一日・二日(筆者未見)、『女誠扇綺譚』と台南の町」(一)・(六)『台湾日報』一九四〇年(昭和十五年)四月二七日、四月二八日、五月一日、五月三日、五月五日、五月七日。

- (23) 前掲新垣『華麗島歲月』二〇〇二年、一四頁。

- (24) 前掲和泉司、二〇一二年、二七二・二七三頁。

- (25) 前掲大東和重、二〇一五年、三七八・三七九頁。

- (26) 前掲大東和重、二〇一九年参照。特に三三三・三五頁。

- (27) 前掲新垣『華麗島歲月』二〇〇二年、四三頁。

- (28) 前掲新垣『華麗島歲月』二〇〇二年、五七頁。

- (29) 前掲新垣「『鄭津梁の日本見聞記』に寄せて」、一九八五年。

- (30) 前掲新垣『華麗島歲月』二〇〇二年、一四五・一五八頁。

- (31) 徳島県立名西高等学校「半世紀の歩み」徳島県立名西高等学校五十周年記念誌「徳島県立名西高校、一九七三年、六〇頁所載の新垣宏一「芸術創設事情」。

- (32) 常松卓三「富岡西高等学校百年史序説」同刊行会、一九九六年、一四一・一四四頁。

- (33) 前掲大東和重、二〇一五年、三五三・三五四頁。大東が参照したのは新垣宏一「住田昇の松山日記について」漱石時代の松山資料として『四国女子大学・四国女子大学短期大学部研究紀要』第二八集、一九八一年と「横地・弘中書き入れ本『坊っちゃん』について」『四国女子大学紀要』二巻一号、一九八二年。この新垣の業績を参照した研究としては松原伸夫「弘中又一・漱石『坊っちゃん』先生」徳島出版センター、一九九七年がある。

- (34) 前掲新垣『華麗島歲月』二〇〇二年、一六一・一六八頁収録。同書の目次上は中文で「美好的回忆」と記される。

- (35) 邱永漢「刺竹」清和書院、一九五八年所収。同小説は後に名誉毀損に当たるとして裁判に発展した。「モデル助教」大いに怒る 邱永漢氏らを告訴」『徳島新聞(夕刊)』一九五八年七月一九日参照。記事は「徳島県教育関係者から材料を提供してもらって書いたものらしい」との弁を引用する。邱永漢との親密な交流、新垣の経歴から見て、この教育関係者は新垣である可能性が高い。

- (36) 前掲新垣『華麗島歲月』二〇〇二年、八六・八七頁。前掲新垣「『鄭津梁の日本見聞記』によせて」一九八五年参照。

- (37) 新垣宏一著・戴嘉玲訳「華麗島文学」『淡水牛津文芸』第四期、一九九九年七月。後に前掲新垣『華麗島歲月』二〇〇二年に「華麗島文学の開拓者」として収録。

- (38) 張良澤「訪新垣宏一先生」『淡水牛津文芸』第七期、二〇〇〇年四月。内容が重複するが前掲新垣『華麗島歲月』二〇〇二年の張良澤「編後語」はより詳細な経緯を記す。

- (39) 新垣宏一著・張良澤訳「華麗島歲月」、戴嘉玲編「新垣宏一先生年譜初稿」(ともに『淡水牛津文芸』第七期、二〇〇〇年四月)、新垣宏一著・張良澤訳「華麗島歲月(続完)」、新垣宏一作・高坂嘉玲訳「城門」、新垣宏一作・杜凡訳「營生」(以上『淡水牛津文芸』第八期、二〇〇〇年七月)。後に全て『華麗島歲月』二〇〇二年に収録。

- (40) 前掲新垣「岸東人さん」追憶の記」、二〇〇七年。

- (41) 新垣宏一「モラエスの遺品の思い出」『徳島文化』第四巻第二号、一九五二年。新垣宏一「モラエス遺品について」『徳島文化』第八巻第一号、一九五五年(同号は「モラエス案内」と題してモラエス翁生誕百年祭記念の特集号として刊行)。

- (42) 佐藤征弥「モラエスの趣味を通じた友人倉本清」と彼が残したモラエス忌の寄せ書きについて」令和四年度徳島大学総合科学部創生研究プロジェクト報告書「異文化から照らし出された四国・地域における外国人受容の意義についての歴史的考察」二〇二三年所収。本稿注(一) 徳島大学附属図書館「徳島大学機関リポジトリ」で閲覧可能。

- (43) 前掲新垣、一九五二年、六頁。

- (44) 新垣宏一「徳島旅情」『台大文学』第一卷第四号、一九三六年、八七頁によれば七年前と四年前に帰省していることが分かる。
- (45) 前掲新垣、一九五二年、六頁。
- (46) 前掲新垣『美麗島歲月』二〇〇二年、三三三―三四頁、四一頁によれば近世、近代文学に興味関心を示していた新垣は植松の覚えがめでたくなかったという。
- (47) 前掲新垣、一九五二年、八頁。
- (48) 前掲新垣、一九五二年、六七頁。
- (49) 前掲新垣、一九五二年、六七頁の「モラエスの遺品！ 人はそれをどんなすばらしいものと想像するであろうか」から「このオルゴールだけはまだ生きていたのではないかと感じた」まで。
- (50) モラエス著・花野富蔵訳『日本精神』第一書房、一九三五年。モラエス著・花野富蔵訳『おヨネと小春』昭森社、一九三六年。
- (51) 西川満「書物放浪(五〇) おヨネと小春」『台湾日日新報』一九三六年(昭和十一年)八月十九日。
- (52) 西川満「モラエスの墓」『台湾日日新報』一九三六年(昭和十一年)八月二二日。
- (53) 前掲新垣、一九七五年、二頁。
- (54) 前掲新垣「台湾時代」、一九九八年、二一六頁によれば、新垣は一九九〇年(平成二年)に病床に伏してからも、夏目漱石、佐藤春夫、林芙美子、モラエス等の文学史研究を続けていたという。
- (55) 村上紀史郎『バロン・サツマ』と呼ばれた男…薩摩治郎八とその時代』藤原書店、二〇〇九年。瀬戸内晴美『ゆきてかえらぬ』文藝春秋、一九七一年所収の同名の小説。

【謝辞】 本稿執筆にあたり徳島県立文学書道館の皆様には資料閲覧などの便宜をはかって頂いた。この場をかりて御礼申し上げます。

(あらたけ たつろう・徳島大学教授)